

吉田鋼市氏 第64回 神奈川文化賞受賞!



西洋建築史研究の第一人者である吉田鋼市氏が神奈川の文化の発展に功績のあった個人・団体に贈られる神奈川文化賞を受賞された。

近代建築を中心として神奈川県内の歴史的建造物の調査を数多く手がけ、その後の保全や活用につながってきたこと、また、建物の歴史的、社会的意義を喚起するとともに、建築に関する専門的な知識

を持たない人々に対しても、「古い建物を見る目」を広く普及させてきたことが評価されたものである。

歴史的建造物の保全活用に携わるもの一同にとって大変勇気づけられる快挙であり、心からお祝い申し上げたい。

吉田鋼市氏 プロフィール

昭和22(1947)年、兵庫県姫路市生まれ。横浜国立大学名誉教授。横浜市歴史的景観保全委員、公益社団法人横浜歴史資産調査会理事(副会長)、横浜市文化財保護審議会委員、湘南臨海文化ネットワーク顧問、よこはま洋館付き住宅を考える会顧問、建築史学会会長など歴任。

第37回歴史を生きかしたまちづくりセミナー

「今を生きる古民家の保存と活用 —保存と活用について、全国の事例に学ぶ—」を開催

- 開催日：平成27(2015)年2月21日(土)
- 場 所：神奈川県庁本庁舎3階 大会議室(旧議場)
- 主 催：(公社)横浜歴史資産調査会・横浜市都市整備局
- 協 力：神奈川県

全国各地で茅葺民家をはじめ町家等の古民家の保存活用が進んでいる。かつては時代の波に押しされ解体の危機に晒されてきた歴史的建造物が見直され、住宅はもちろん店舗や交流拠点として立派に地域に息づいてきている。

横浜にも沢山の古民家がある。歴史を生かしたまちづくりの大切な要として、市民、行政、専門家、企業等が力を合わせて、地域の宝物として歴史的建造物の保存活用を推進していくとの思いをこめて、セミナーを開催した。

記念講演では、岩手県指定文化財村上家当主の村上和子氏が「女手一つで甦らせた茅葺き民家」をテーマに、岩手県一関市千厩町に生まれ育ち、村上家に嫁した後、荒れていた同家の茅葺き民家を修復し、文化財にまで昇華してみせたことを熱く語った。

続く基調講演では、横浜国立大学大学院教授・(公社)横浜歴史資産調査会理事の大野敏氏が、神奈川県内に残る古民家の保存継手法という観点からその特徴



を分類し、県内でどのように古民家が残されてきたのかということ、さらに残されてきたものをどのような制度や地元との協働で守っていくのか知恵を出し合っていくことが重要であると語った。

パネルディスカッションでは、村上氏、飯田助知氏(横浜市指定文化財飯田家当主)、清水靖枝氏(長屋門公園歴史体験ゾーン運営委員会事務局長)が登場し、維持管理の苦労話や地域交流の素晴らしさなどが実感できる場であることが語られた。大野氏からは、保存にはアドバイスできる人の存在が重要であるとのコメントがあった。最後に、コーディネーターを務めた米山淳一氏((公社)横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)が、住み続けることこそが次世代に古民家を引き継いでいくことなので、住み続けていただきたいと締めくくって、セミナーを終了した。

堆積物が150～200mmほど存在した。隧道は軟岩でできており、下流域入り口付近に、支保工を組んだ際にできたと思われる穴が数ヶ所存在した。隧道内の壁側は水底に近づくにつれて内側に反っており、楕円形であるのではないかと推測される。今後、いたち川の河川改修に合せて、隧道の保全と市民が親しめるような活用について

具体的に検討されることが望まれる。



いたち川河川隧道の入口

公益社団法人 横浜歴史資産調査会のとりのくみ

“歴史を生きかしたまちづくりファンドスタート記念コンサート”は盛会!!

平成27(2015)年9月29日(火)午後7時より、国重要文化財である横浜市開港記念会館講堂を会場に、「歴史を生きかしたまちづくりファンドスタート記念コンサート」を開催した。宮村忠会長挨拶の後、歴史的建造物の優雅な空間の中で、後藤泉氏(ピアノ)、クリストフ・エーレンフェルナー氏(ヴァイオリン)、ヘルベルト・ミュラー氏(ヴィオラ)による室内楽演奏が1時間40分にわたり熱演され、約130名の聴衆がモーツァルト、ブラームスの流麗な音色に酔いしれた楽しい演奏会となった。

本コンサートは、公益社団法人横浜歴史資産調査会が、私たちの宝である歴史



的資産を将来にわたり保存・活用していくことを目的としたファンドをスタートさせることを記念して行ったものである。今後もこのような催しを企画し、多くの方々に歴史的資産の魅力をお伝えするとともに、ファンドの趣旨にご賛同いただけるよう努めていきたい。

※当日は募金箱に26,000円のご寄附を賜りました。ありがとうございました。

〈シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラムを開催〉

—シルクロードでつなぐ街と人—

- 開催日：平成27(2015)年 3月14日(土)：見学会 3月15日(日)：フォーラム
- 主 催：公益社団法人横浜歴史資産調査会
- 共 催：NPO法人街・建築・文化再生集団
- 協 賛：株三陽物産、株大川印刷、株tykコミュニケーションズ、株タカシン、山陽印刷株
- 後 援：横浜市中区、ヨコハマ経済新聞、ヨコハマ洋館探偵団



の建物10棟を国登録有形文化財にした新庄市(山形県)、岡谷蚕糸博物館(長野県)、片倉館(国重要文化財・長野県)、蚕都・上田の絹遺産(長野県上田市)、蚕種で繁栄した重要伝統的建造物群保存地区・海野宿(長野県東御市)、重要伝統的建造物群保存地区・上条集落(山梨県甲州市)、荒船風穴(世界文化遺産・群馬県下仁田町)、養蚕農家集落(群馬県昭和村)、レンガ倉庫の保存(群馬県前橋市)、養蚕文化の伝承(茨城県つくば市)、女工官舎の保存(茨城県桜川市)、絹関連建造物の保存(埼玉県飯能市)、蚕糸試験場の保存(東京都日野市)、山手の西洋館(横浜市)他からの事例発表が行われた。参加者は約130人。一号室では、参加団体のパネル展示も行われた。

「シルクロード・ネットワーク」の設立が全員一致で採択され、フォーラムは終了した。(文：米山 淳一)

港 鉄道 ヨコハマ プロジェクト

我が国に初めて鉄道が開通したのは明治5(1872)年10月、新橋—横浜である。今年で143年を迎えた。この間、鉄道は全国に延伸し、世界に誇る新幹線システムをも構築した。旅客だけではなく貨物輸送にも重点が置かれ、昭和50年代前半までは、港横浜に鉄道は健在だったのである。皆様に親しまれている「汽車道」は、明治40年代に敷設された横浜臨港線の跡地を遊歩道として整備したものである。橋梁、石積み、軌道からかつての鉄道の痕跡を実感でき、近代の輸送体系を



知るうえで貴重な近代化遺産と言える。言わば、鉄道無くして港は成り立たなかったのである。

このたび「横浜港大さん橋にぎわい創造委員会」からの助成事業として、港を中心とした鉄道遺産の調査、シンポジウムの開催等を通して広くその魅力を伝えていくプロジェクトを推進することとなった。

「歴史を生きかしたまちづくり相談室」受付中!! 皆様からのご相談をお待ちしています。

【連絡先】公益社団法人横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテージ)内 「歴史を生かしたまちづくり相談室」〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室 TEL/FAX: 045-651-1730 E-mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp



歴史を生きかしたまちづくり 横濱新聞

第31号 平成27[2015]年 11月30日発行 Since 1989

甦るゴシック・モダン — 横浜海岸教会の修復なる

公益社団法人 横浜歴史資産調査会 理事・副会長 吉田 鋼市

1 年半ほど現場シートで覆われていた開港広場のランドマーク、横浜海岸教会の瀟洒な姿をまた目にするようになった。その竣工祝賀会が平成27(2015)年5月に行われたが、改修なった清浄な聖堂で信徒の方たちの聖歌を聴いたときは、一種身の震えるような感動にとらえられ、いくつかの難しい改修の課題を克服された人たちや、この教会が経てきた長い歴史に思いを馳せて、まれにしか味わえない濃密な時間を経ることができた。

実際、この教会の歴史は非常に古く、信仰の集まりとしては明治5(1872)年に日本人最初のプロテスタント教会たる日本基督公会が設立されたのを初めとする。その3年後の明治8(1875)年に教会堂が、現在の開港広場(当時は居留地167番、宣教師バラ夫妻の居住地だった)に、名前も同じ横浜海岸教会として完成しており、建物としての横浜海岸教会の歴史はここから始まる。もっとも、この同じ場所の脇に明治元(1868)年ころまでには建てられていたと考えられている小さな礼拝堂「石の会堂」がすでに存在していたし、居留地105番には文久3(1863)年に英米人のためのプロテスタント教会、クライストチャーチもすでに建てられてはいた。とはいえ、横浜海岸教会を日本人の最初のプロテスタント教会の教会堂とすることに間違いはないであろう。その長い歴史の生き証人が、いまも使われている1875年創建時に米国で鋳造された鐘である(鐘の側面に「The Meneely Bell Foundry, West

Troy, N.Y. 1875」の銘がある。Foundryは本来はFoundryであるが、こうした綴りもかつてはあった。この創建時の横浜海岸教会と「石の会堂」が関東大震災で壊れた後に建てられたのが、現在の横浜海岸教会で、その竣工は昭和8(1933)年3月。そして今回、耐震補強とバリアフリーのためのエレベーターを設けるのが主目的で、合わせて大規模な改修が行われたというわけである(設計は無名設計システム、耐震設計はKR建築研究所、施工は北野建設)。

1933年竣工の現会堂の設計は雪野元吉(1897-1945)、施工は宮内建築事務所。雪野元吉は名古屋生まれの横浜育ちで、横浜の戸部小学校を卒業し、その後、東京美術学校(現・東京芸大)建築科を出ている。宮内省内匠寮に勤めながら数々のコンペに受賞したこの時代有数のコンペキラーであり、その造形的才能は推して知るべし。コンペ当選で唯一実際に建てられたのが新京東聖堂塔(1934年竣工)だが、現存しない。昭和13(1938)年に内匠寮を辞して神戸の川崎造船(現・川崎重工)に入社して船内設計に従事。出雲丸の船内設計の主要メンバーでもあったが、この船も建造途中から軍艦に改造されて、後に沈没。本人も終戦直後に外地で病没。つまるところ、横浜海岸教会が雪野の唯一の現存作品ということになる。施工の宮内建築事務所も本牧にあった横浜の老舗の建設業者。宮内初太郎(1892-1957)が大正13(1924)年に、父半太郎の死去に伴って継承しているが、初太郎自身は東京高等工

業(現・東京工大)出身の建築家でもあったので、設計もやっており、宮内建築事務所設計・施工の建物も多い。昭和10(1935)年に会社名を宮内組としている。

さて、この横浜海岸教会であるが、内外ともユニークで、尖りアーチや三葉アーチ、それにチューダーアーチ風の平たいアーチや四つ葉飾り(カトロフォイル)も見られる。また窓や窓形の壁の窪みは非常に細長く、強い垂直性を醸し出している。これらはすべてゴシックの基本的要素であるが、しかし内部の講壇の左右の柱頭の装飾はロマネスク風でもあり、会堂の天井は直線の六角形である。鐘塔には楕円の窓もあるし、その二重に重ねられた庇はクラシックの要素も備えている。そして外観全体の印象は、18世紀の英米の教会堂、たとえばC.レンヤ、J.ギブズの教会堂にも少し似ているが、しかしそれよりも評したい気がする。

とりわけ個性的なのが、くだんの歴史ある鐘をつるした正面の鐘塔の頂部で、そこにはあまり間隔をあけずに配された屋根と塔の二つの庇が見られる。眉と目の間が狭いエキゾチックな美人といったところだろうか。屋根の庇は四方に三角破風を見せて華やかであり、しかも両方の庇の下に、これまた独特の形をした持送りが、上のほうは各面に13個、下のほうは各面に15個、密集して設けられている。しかも、その持送りの形が上と下で異なり、上のほうは横長で、下のほうは縦長。わが国の絵様に相当する側面の装飾も、上は唐草文様風で、下は雷文風というように、上と下で異なる。この鐘塔の頂部付近は、造形的密度がきわめて濃い。そして尖った四角錐の屋根の最頂部は十字架である。

撮影：米山淳一

歴史を生かしたまちづくりファンド スタート!

第38回歴史を生かしたまちづくりセミナー 「みんなで支える明日の 『歴史を生かしたまちづくり』」を開催

- 開催日：平成27(2015)年6月24日(水)
- 場 所：横浜市開港記念会館 講堂
- 主 催：(公社)横浜歴史資産調査会・横浜市都市整備局

横浜では、昭和63(1988)年に「歴史を生かしたまちづくり要綱」を施行し、横浜らしい個性と魅力あふれる都市景観を形成している歴史的建造物の保全・活用に取り組んできた。しかしながら、近年歴史的建造物の滅失が続き、歴史を生かしたまちづくりの行く末に黄色信号が点滅している。

横浜の大きな魅力である歴史的建造物は、これまで所有者の努力によって守られてきた。これを引き続き保全活用していくことは、将来の横浜にとって非常に重要なことであると考え、横浜市は平成25(2013)年に「歴史を生かしたまちづくり」の推進について」を策定している。

今後はこれまでの取組に加えて、新たな制度や施策を着実に進めていくことで、所有者が保全活用をよりいっそう進めやすい環境を整えるとともに、所有者だけでなく、市民、行政、専門家、企業等が力を合わせ、連携していくことが一層重要であると考え、今回のセミナーの開催に至った。



パネルディスカッション 左から、米山淳一、後藤治、鈴木智恵子、山本博士、綱河功

初めに、(公社)横浜歴史資産調査会の吉田鋼市副会長、横浜市都市デザイン室 綱河功室長から主催者挨拶があった。「もう壊さない!歴史的建造物は横浜の『もう壊さない!』歴史的建造物は横浜の宝」と題した記念講演では、工学院大学建築学部教授の後藤治氏が、歴史的建造物の保存と活用について近年横浜で講演してきたことをおさらいし、もう一度歴史を生かしたまちづくりの原点に戻ってこれからの考えることを訴えた。そうした中から日本の住宅政策の課題や矛盾点、これから必要とされるいくつかの仕組み等、海外事例を踏まえながら語った。そして今必要とされることは建築基準法の特例的な運用と市民ファンドの創設であると結論付けた。

セミナー後半のパネルディスカッションでは、鈴木智恵子氏(エッセイスト)、山本博士氏(株)三陽物産代表取締役社長・宮川香山真葛ミュージアム館長)、綱河氏、後藤氏が登壇し、コーディネーターを務める米山淳一氏((公社)横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)により進められた。

パネリストそれぞれの立場から「壊れるものを支える仕組み、企業の社会貢献と市民ファンドの必要性、ファンド創設の期待」といったことが熱く語られた。これらの話を受けて、米山氏は早速ファンドの立ち上げを表明し、セミナーを終了した。多くの参加者たちからも、今後を注目していくと共に、ファンドに期待するとの意見が多く寄せられた。

「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄付のお願い

「歴史を生かしたまちづくりファンド」は、皆さまの貴重なご寄付によって成り立ちます。「歴史を生かしたまちづくりファンド」に造成された基金は、歴史的資産等の調査、修理、取得、管理、啓発等に関するプロジェクトに使用いたします。

横浜歴史資産調査会は内閣府認定の公益社団法人であり、免税団体です。「歴史を生かしたまちづくりファンド」への寄附金は、税法上の優遇措置(寄附金控除)を受けることができます。詳細は事

務局までお問い合わせください。横浜を愛する皆さまのご支援をよろしくお願いいたします。

- 個人：一口 3,000円
- 団体・企業等：一口 100,000円
- 振込先：横浜銀行 県庁支店
普通口座 1252365
公益社団法人
横浜歴史資産調査会
代表理事 宮村 忠

【お問い合わせ先】(公社)横浜歴史資産調査会 事務局
〒231-0012 横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号室
TEL / FAX : 045-651-1730 E-mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp

歴史を生かしたまちづくりファンド 寄附者インタビュー

歴史を生かしたまちづくりファンドに早速寄附を申し出ていただいた山本博士氏(株)三陽物産代表取締役社長)と本多初穂氏(株)勝烈庵代表取締役社長)のお二人に、横浜の歴史を生かしたまちづくりに対する思いなどを語っていただいた。

インタビュー：米山淳一(公社)横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)



山本博士氏

米山：本日のインタビューは山手地区の代表的な西洋館であるベリック・ホールをお借りしていますが、良い雰囲気ですね。

本多：子どものころから山手に住んでおり、ベリック・ホールはセントジョセフ・インターナショナルスクールの男子寮だったころから知っていますが、当時はだいぶ傷んでいたのがこうして綺麗に生まれかわって公開されるようになってうれしく思っています。

山本：ベリック・ホールに代表される西洋館が保存されていて、山手全体が良い雰囲気になっていると感じます。

米山：まずはお二人の歴史を生かしたまちづくりへの関わりなどについてお話しください。

本多：もともとは祖父(故・本多正道氏)が田中澤邸を山手資料館として残したり、山手十番館を建てるなど歴史を生かしたまちづくりに取り組んでいて、そのDNAが引き継がれたのだと思います。

山本：「お菓子を通じて横浜の歴史・文化を継承する」を会社のスローガンにしています。まずは、歴史的建造物をより多くの人に知っていただくことが保全の取組の第一歩だと考えています。本多正道氏は歴史を生かしたまちづくりとビジネスをうまく組み合わせ取り組まれた尊敬する経営者です。

本多：祖父は祖母に店を任せながら、自分が好きな歴史や文化の趣味を商売にからめてうまくやっていたように思います(笑)。

米山：横浜の最近の状況についてどのようにお考えですか？



本多初穂氏

山本：大変貴重な建物が取り壊されるなど、危機的な状況だと感じています。

本多：私も同じように感じています。もちろんお金の問題もあるのだけれども、企業などの歴史的建造物所有者が「残さないと横浜にいらなくなる。壊してはマズいのでは…」と考えるような雰囲気が必要だと思います。

米山：これからの横浜の歴史を生かしたまちづくりについての「夢」や想いをお聞かせください。

本多：私が子どものころは、赤レンガ倉庫や象の鼻地区には立ち入ることができませんでした。今は保存されて、横浜の名所となっています。まちづくりには長い時間がかかるものです。今の子どもたちが、街に歴史的建造物があるのが「あたりまえ」と思えるように引き継いでいけたらと思います。

山本：できる限りオリジナルの歴史的建造物が引き継がれるようになると良いと思います。そのためにも柔軟な運用が期待できる「歴史を生かしたまちづくりファンド」に、より多くの企業が参加できるように仲間の経営者にも声をかけていきたいと思っています。

本多：企業としてはファンドだけではなく、アイデアや技術の提供など多様な参加を呼び掛けていきたいと思っています。

米山：多くの方に参加していただき、明るく、楽しく取り組めるようにしていきたいですね。ありがとうございました。

平成27(2015)年11月5日 ベリック・ホール(協力：公益財団法人横浜市緑の協会)



左から、米山淳一、山本博士、本多初穂

保土ヶ谷カトリック教会の実測調査

黒田泰介(関東学院大学 建築・環境学部 教授 / (公社)横浜歴史資産調査会 社員)

旧東海道の宿場町、保土ヶ谷の街並みを見下ろす露台には、桜並木の閑静な住宅街の中に、瀟洒な木造聖堂が建つ。グレーの外壁が落ち着いた佇まいを見せる建物は、保土ヶ谷カトリック教会である。ネオ・ロマネスク様式、木造二階建ての教会堂は、パリ外国宣教会のヨハネ・シェレル神父によって昭和14(1939)年に建立された。エリスマン邸でおなじみの建築家アントニン・レーモンドの片腕であり、山手カトリック教会を手がけたチェコ人建築家ヤン・ヨセフ・スワガー(1885-1969年)の設計は、半円アーチが連なる三廊式の伸びやかな構成をもつ。エントランス上の切妻屋根にはクロスと円を組み合わせたケルト十字が立ち、外壁には半円柱



教会堂：ネオ・ロマネスク様式の外観

を備えた二連窓が連続する。窓と窓の間には意匠化されたバットレスが置かれ、リズムミカルなアクセントとなっている。

平成27(2015)年4月30日~5月2日にかけて、保土ヶ谷カトリック教会・李神父のご許可を得て、関東学院大学建築・環境学部の学生と共に、この貴重な建物の実測調査を行う事が出来た。「建築再生デザインスタジオ」の一環として、本授業講師である地元建築家、兼弘彰氏の協力の下、3、4年生18名が教会堂とモダンリズム様式の司祭館(1938年築)の2棟を同時に調査することとなった。

白い教会堂内には10本の赤大理石風の円柱が並ぶ。身廊の船底天井は大アーチで分節される。天井面のヴォールト、円柱間の半円アーチの連続は、空間に軽さと広がりを与えている。身廊のスパンは27尺(8,181mm)で、左右に四尺幅(1,363mm)の狭い側廊がつく。円柱は桁行方向では11尺(3,333mm)毎に配される。身廊スパンは内陣手前ですばまって、祭壇上では23尺(6,969mm)となる。これは内陣左右に礼拝所を設けたためと

思われるが、祭壇正面から堂内を見出した際、奥行を強調する透視図法的な効果があって興味深い。

小屋裏に上がると、懸念されていた雨漏りもなく、木造トラス構造も良好な状態を保っていた。トラスは両端の径200mm余の杉丸太二本で支持される。この丸太は堂内の円柱、人造石研ぎ出し仕上げの芯となる。当初、木製かと思われた彫りの深いコンボジット様式の柱頭は、近づいて観察すると、スサを混ぜて強化した石膏彫刻を着色したものであった。本建物は木造のため、白壁は全て漆喰塗りだ。小屋裏からは柱やトラスの隙間を縫うように設けられた半円アーチやヴォールト下地の木摺と棧が見え、左官屋の苦労が偲ばれる。

教会堂の前年に竣工した司祭館は、木造二階建てのモダン洋館だ。玄関ポーチのステンドグラス、ライト風の幾何学紋様が目を引く。一階は教会事務室、二階は三室に分かれて神父の居室とゲストルームになっている。一階西側の一部は取り壊され、現在は信徒会館が建つ。高い天井と丁寧な造作が、司祭館の格調高



教会堂：アーチとヴォールトがつくる軽やかな内部空間

い室内を創り上げている。教会堂と司祭館の実測図面、教会堂の断面模型(1/20)をつくった後、学生たちは実測調査を通じて実感できた歴史的建造物の建築的特質、敷地のコンテクスト、そして教会関係者の方々の建物を大切にしたい思いを踏まえて、第二課題として教会の敷地内に、地域コミュニティの核となる教会付属ギャラリーをデザインした。授業の成果は保土ヶ谷宿場祭(10月11,12日)と教会主催のチャリティバザー(11月8日)にて展示することができた。我々のささやかな活動が、貴重な建築物の保存と利活用に貢献することが出来れば幸いである。

震災復興施設群 土木学会選奨土木遺産に認定

関東大震災後に整備された橋梁・隧道を含む震災復興施設群が平成27(2015)年度の「土木学会選奨土木遺産」に認定された。

認定されたのは山手・元町地区の「山手隧道」「櫻道橋」「西の橋」「谷戸橋」「打越橋」の5施設。横浜の都市形成において重要な役割を担い、設計・意匠等最先端の土木



打越橋

技術が取り入れられ、歴史的構造物としても貴重であることが評価された。一方、建築的な視点からも震災復興橋梁を再評価する動きもある。

JIA(公益社団法人日本建築家協会)関東甲信越支部まちづくり保存委員会は、平成26(2014)年度の1年をかけて横浜市内周辺に残っている震災復興橋梁を調査し、「建築WEEK(JIA神奈川主催：平成27年2月24日~3月1日)」の一環として馬車道駅コンコースにおいて報告展示を行った。同委員会の笠井三義氏は、「橋は、元来土木の分野ですが、関東大震災の復興橋梁にあっては、短い時間の中で建築家も加わった意

旧見番を活用した町内会館

県道・平戸桜木道路から少し入った南区井土ヶ谷上町の閑静な住宅街に、かつて地元芸妓組合の事務所や稽古場であった「見番(検番、けんばん)」の建物が残されている。

昭和12(1937)年に建てられた近代和風の建物で、外壁や内部構造の一部などを改修しているものの、正面には入母屋造



井土ヶ谷上町第一町内会館

で瓦葺のポーチが付き、その天井は格天井で、吹き寄せの縦格子の欄間が付き、玄関引き戸上部の欄間は細かい組子となっており、往時の華やかな雰囲気をよく残している。また、見番のメインとなる大広間も残されており、見番として使われた建物で横浜市内に現存するものは他に見当たらず、希少性は高い。

現在は、地元・井土ヶ谷上町第一町内会の町内会館として活用されている。かつての花街の面影を残す建物であり、井土ヶ谷の歴史を伝える建物としても重要であるので、今後は、建物の安全性を向上させつつ、地域の拠点として活用されることが期待される。

平成27(2015)年に、歴史的建造物「井土ヶ谷上町第一町内会館(旧井土ヶ谷見番)」として登録された。

中区分庁舎別館がオープン!

中区役所となりの認定歴史的建造物である旧神奈川労働基準局(元日本綿花横浜支店倉庫)が中区役所別館としてリニューアルオープンした。

昭和3(1928)年の建築で、設計は隣接する元日本綿花横浜支店事務所棟と同じ

く渡辺節建築事務所。平成27(2015)年2月までに耐震改修等の工事が完了した。外壁は劣化が激しく剥落の恐れがあり保存が困難



内観

だったことから張替となったが、スクラッチタイルの意匠を継承し、内部についてもマッシュルーム柱と言われる特徴的な柱を保存するなど工夫がなされている。また、隣接し工事中となっている旧日本綿花横浜支店事務所棟(横浜市指定文化財・旧関東財務局)も、創造産業の集積を推進し、賑わいの創出及び経済の活性化につなげる中核施設として保存活用することが決まっており、工事完了後には日本大通りの玄関口に連続した歴史的景観が甦ることとなっている。